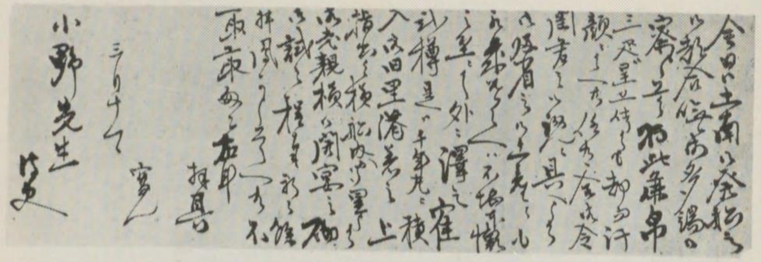
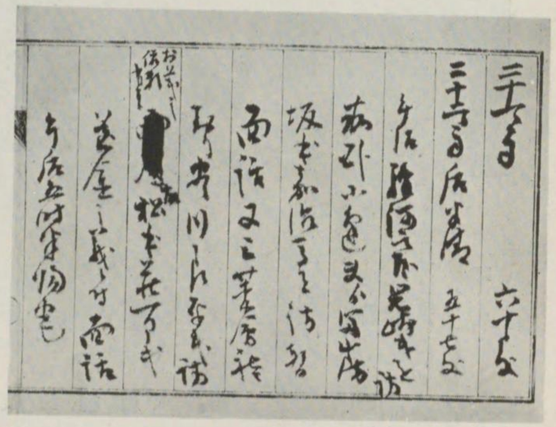
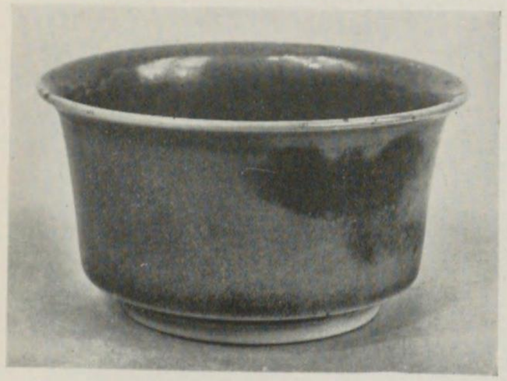
冨山房がだん〳〵手を擴げだした頃であつたから、この翁の言葉は殊に感銘深く、恐縮した次第であつた。明治三十九年五月九日に小野翁はおかくれになられたが、同年の一月御見舞に伺ふ前日、友人を尋ねた事があつた。その友人の家は立派な邸宅で、屋敷も二萬坪もあるかと思はれる堂々たるものであつたから、座敷へ通つて主人を待つ間に、商人は四十位までに產を成さないとダメだと思つた。しかしその友人は自分より二ツ三ツ年上で、その頃四十二三であつたと思ふ。翌日御見舞に伺つて小野翁の病床でその御話をしたら「そんな弱い事を考へるものでない、おれはお前の年位には今のお前程の資產は無かつたかも知れない、これからぼんたうの仕事が出來る、しつかりやれ」と言はれた。この一言で非常に勇氣づけられ、それから自分の心境も變つて來たのである。要するに翁はかうして始終自分を伸ばし導いて、どうにか人間にしてやらうと云ふ厚い溫情を持たれ、何かにつけてそれが現れたものであつたと思はれる。翁は嚴格細心の人であつたが、また一面豪放で大膽な人でもあつたのである。向島の別邸小松園は一萬坪餘りの大庭園で、鹽釜の小松島に模したものと聞いてゐる。いはゆる平庭式のもので、池あり、丘あり、所々に小橋を架し、池には水鳥の遊ぶあり、殊に季節には鴨の群を成して集ると言ふ樣な廣大豪華を極めたものであつた。また先生の小傳にもあるとほり、初代岩崎彌太郎氏と吉原に豪遊して繩のれんでビールを三十六本たひらげた事もある位で、



小野義眞翁遺芳

上は小野義眞翁に宛てた岩崎彌太郎氏の書簡
中は明治三十六年四月二十一日、同二十二日兩日の小野義眞翁の日記
下は小野義眞翁によつて創められた小野蕉の俳句は翁の筆技





桃齋

元日や此世の中に鬼はなし
咲き揃ふ花も行儀や神の庭（兩宮參拜）
珍らしき日和や老の初袷
夕立のうしろに高し不二の山（車中所見）
鶏來て風情添へけり雪の庭

E13573257 小野　一雄 2023/06/03 10:47:25